



注目の新刊を  
チェック!

半谷史郎・岡奈津子著

## 中央アジアの朝鮮人 ―父祖の地を遠く離れて―

(ユーラシア・ブックレットNo.93、東洋書店、2006年)  
ISBN 4-88595-633-1 63頁 定価:本体600円+税



旧ソ連の朝鮮系住民には、大別して2つの流れがある。第1に、19世紀半ば以降、朝鮮半島の北東部から貧困や土地不足にあえいでいた農民が現在のロシア沿海地方に移住し、その住民たちがソ連のスターリン体制下で中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタン）に強制移住させられ、その末裔が今も中央アジアとロシアに住んでいる。第2に、第二次大戦中に日本支配下の朝鮮半島から権太に強制連行され、戦後もサハリンに残ることになったいわゆる「サハリン朝鮮人」の存在がある。今回紹介するブックレットは、前者の問題を扱ったものである。

上述の2つのパターンのうち、後者のサハリン朝鮮人の問題は、日本が直接かかわっているだけあって、我が国でも時折話題になる。それに比べると、前者の「大陸系」朝鮮人の問題に日本人が目を向けることは稀なのではないか。だが、実は彼らの運命は、日本という要因によって大きく翻弄されたのである。なぜなら、スターリン時代に朝鮮人が民族丸ごと極東ロシアから中央アジアに移住させられたのは、彼らが日本のためにスパイとして働くことをソ連当局が恐れたからだったのだ（そして、それはまったく根拠のないことでもなかった）。ちなみに、この時代のソ連で民族ごと強制移住の憂き目に会った民はチェチェン人やクリミア・タタール人など他にも例があるが、本書によれば、初めてその被害にあったのが朝鮮人だったとのことである。

おそらく、本月報の読者にとっては、第4章の「ソ連崩壊後の朝鮮人社会」がとりわけ興味深いのではないだろうか。1990年代に韓国企業が中央アジアに積極進出した一つの背景として、この地にソ連時代から住んでいた朝鮮人の存在があった。他方、現地朝鮮人の側も、実際のルーツは朝鮮半島北東部にあるのに、北朝鮮ではなく、経済的に豊かな韓国をパートナーとして選んでいるというのが面白い。ただ、大陸系朝鮮人はほとんどが朝鮮語を失っているようで、韓国企業が期待したほどの「架け橋」としての役割は果たせていないという。この点、ソ連に渡った時代が比較的新しいサハリン朝鮮人とは事情がだいぶ異なる。

旧ソ連の朝鮮人という、一見特殊なテーマを扱いながら、それを通じて北東アジアやロシア・中央アジアの歴史と現在について考えさせてくれる、そんなブックレットである。

(服部 倫卓)